

# 中国語動詞“托”[tuō] “端”[duān] “捧”[pěng]の意味について

劉麗

## 1. はじめに

“托”“端”“捧”は共に「手で下から対象物をささえもつ」意味に用いられる。<sup>1)</sup>

(1) 用手托／端／捧着碗。(手で茶碗を持っている。)

(2) 用手<sup>×</sup>托／<sup>×</sup>端／捧起一把雪。(手で雪を持ちあげる。)

(1)で、“托”“端”“捧”共に用いることができるが、(2)では、“托”“端”を使うと、文は不自然になる。この三つの動詞は、同じく「手で対象物をささえ持つ」意味で用いられても、細かくニュアンスが異なっているからである。

次は『新華辞典』と『現代中国語辞典』にある三つの動詞に関する記述である。ここから分かるように、辞書の記述では、三つの動詞の区別は、明確にされていない。

『新華字典』	『現代中国語辞典』
托 ① 用手掌承着東西。	① 手のひらで物を承ける。
端 ① 用手很平地拿東西。	① <u>両手</u> を胸前に平にして持つ。
捧 ① 両手托着。	① 両手で捧げるようにして持つ。

(アンダーラインは筆者)

不明確なだけでなく、『現代中国語辞典』のように、“端”を、「両手で持つ」と、誤訳する場合もある。

従来、“托、端、捧”の意味用法を記述したものとして、荒川1982があり、“端”を「形態と移動とを表す動詞」に、“托”“捧”を「移動が含まれず、もっぱら形態を表す動詞」(p.12)に分けて、論じている。だが、三つの動詞の用法の差には、「形態」と「移動」の外に、「対象物の性質」、「動作の様態」、という要因も働いているようだ。次に、「対象物の性質」、「動作の様態」及び「特別な意味用法」の三つの方面から分析してみる。

## 2. 分析

### 2.1. 対象物

#### 2.1.1. 対象物の重さ

“托”“端”“捧”は手で物を持つ動作なので、対象物は手の力で持てるぐらいの重さの物に制約される。この点では、三つの動詞は一致している。

(3) 托／端／捧着碗。(茶碗を持っている。)

(4)<sup>×</sup>托／<sup>×</sup>端／<sup>×</sup>捧着桌子。(机を持っている。)

普通、「机」はかなり重いもので、手の力だけでは持てないので、特定の文脈がない限り、この三つの動詞とは共起しにくい。

#### 2.1.2. 対象物の形状

さらに、三つの動詞の対象物の形状にも、それぞれ制約がある。“托”は固体、あるいは容器を対象とするが、“捧”は固体、容器の他、液体、粉末、粒状の物をも対象とする。そして、“托”、“捧”両者と異なり、“端”は容器しか対象物にしない。

(5) 張三托／端／捧出一碗酒来。(張三は一碗のお酒を持ってきた。)

(6) 張三托／<sup>×</sup>端／捧着一个球。(張三は一個のボールを持っている。)

このように、例文(6)の場合、“端”を用いると、文は不自然になる。さらに、

(7) 張三托／端<sup>×</sup>捧着托盆送菜。(張三はお盆を持って料理を運ぶ。)

(7)のように、同じ容器にしても、“托”“端”は特に容器の形にこだわらないが、“捧”は「お盆」のような、「両手ですくう」ように持ちにくい容器とは共起しにくい。そして、

(8) 張三用手<sup>×</sup>托／<sup>×</sup>端／捧起一把雪。(張三は積もっている雪を両手ですくい上げた。)

(9) 張三用手<sup>×</sup>托／<sup>×</sup>端／捧起一把面粉。(張三はメリケン粉を両手ですくい上げた。)

(10) 没有碗、張三只好用手<sup>×</sup>托／<sup>×</sup>端／捧着泉水喝。(茶碗がないので、張三は泉の水を手ですくって飲むことにした。)

(11) 張三用手托／<sup>×</sup>端／捧着一塊冰。(張三は一塊の氷を手で持っている。)

(12) 張三用手托／<sup>×</sup>端／捧着一个包子。(張三は一個の饅頭を手で持っている。)

これは後述する“捧”の動作の様態と関係するが、(8)(9)(10)のように、対象物が粉末、液体の場合、容器なしには、“托”“端”と共起しにくく、“捧”しか用いられない。一方、“端”については、(11)(12)のように、対象物が固体の場合でも、容器がない場合

には、“端”を用いると不自然になる。次の用例も同じである。

(13) 張三用塊白菜葉兒托／<sup>×</sup>端着一个包子。(張三はなっばにのせた饅頭を一個もっている。)

(14) 張三用紙托／<sup>×</sup>端着一个包子。(張三は紙にのせた饅頭を一個もっている。)

(15) 張三用盤子托／端着一个包子。(張三はお皿にのせた饅頭を一個もっている。)

このように、“端”は“碗”“盤子”“鍋”“杯子”など「容器」の類を対象にするのが普通である。

(16) 張三端着一杯水。(張三は水のはいったコップを持っている。)

(17)<sup>?</sup> 張三端着一个空杯子。(張三はからっぽのコップを持っている。)

(16)に比べて、(17)は不自然に聞こえる。これは、“端”に「物が入った容器を水平に持つ」ニュアンスがあるからである。“端”に次のような慣用的な用法があるのも、このようなニュアンスがあるためであろう。

(18) 他对自己的教育对象不分等級、不分地域、一視同仁、同等对待、端平一碗水、…(彼は自分の弟子に、身分の差別をせず、出身地による差別もせず、みんな同じ人格の者として平等に取扱うこと、あたかも一碗の水を水平に保つ〔平等に人に接することの比喩〕がごとくである。)(超亜興1987.9.25.「重提“有数無類”」《人民日報海外版》)

しかし、“托”“捧”にはこのような慣用表現はない。

## 2.2. 動作の様態

### 2.2.1. 片手か両手か

“端”“捧”については、「両手を用いた動作である」と記述する辞書が多いが、“托”には特に明記されていない。次は『漢語常用動詞搭配字典』の記述である。

托：hold in the palm; support with the hand or palm.

端：hold sth level with both hands. (sth = something)

捧：hold or carry in both hands. (アンダーラインは筆者)

この記述では、“托”は「片手」で持つ動作、“端”は「両手」で持つ動作のように記されているが、実はそうではない。次の例をみよう。

(19) 一只手托着盤子送菜。(片手で料理を運ぶ。)

(20) 両手托着腮。(両手で頬杖をつく。)

(21) 他双手托着這位少爺。(彼はおそろおそろ両手で赤ん坊を抱いた。)[駱駝祥子]  
(p.44)

(22) …手托着腮下、…(彼は手で顎を支え…)『駱駝祥子』(p.104)

このように、“托”は片手を用いた動作も、両手を用いた動作も表す。どちらかはっきりさせたい場合は、“一只手”“両手”“双手”などのように、「手」に修飾語をつけて限定する。しかし、(22)のように、特に明示しない場合は、いずれにも解釈できるのである。

また、“端”についても、辞書では、「両手で持つ」と記述しているが、実際は必ずしもそうでもない。

(23) 張三端着盤子。(張三はお皿を水平に持っている。)

(24)<sup>?</sup> 張三双手端着盤子。(張三は両手でお皿を水平に持っている。)

(25) 張三一只手端着盤子、另一只手拿着筷子。(張三は片手にお皿を水平に持ち、片手にお箸をもっている。)

“端”は、普通「両手で持つ」イメージが強いので、例文(24)のように“双手”を加えると、冗長になる。さらに、次の例文をみよう。

(26) 他把酒盅端起来、喝了多半盅、一閉眼、哈了一声。(…なみなみと注いた杯を取り上げ、目をつぶって一息グッと飲み干してしまった。)『駱駝祥子』(p.50)

(27) 待了一会、老程回来了、端着兩大碗甜漿粥、和不知多少馬蹄燒餅与小油炸鬼。(暫くすると老程は甘味噌のお粥の入った大丼と沢山の馬蹄形の焼餅と小型の油炸果とを抱えていそいそと戻って来た。)『駱駝祥子』(p.112)

(26)は、片手、両手いずれにも解釈できるが、(27)はあきらかに、片手に一碗ずつ持っていることを表している。

一方、“捧”はあくまでも両手で行う動作である。

(28) 張三捧着一个碗。(張三は茶碗を両手で捧げ持っている。)

(29) 張三双手捧着一个碗。(張三は茶碗を両手で捧げ持っている。)

(30)<sup>×</sup> 張三一只手捧着一个碗。(張三は茶碗を片手で捧げ持っている。)

例文(28)には、“双手”と明記されなくても、“両手で持つ”ニュアンスが読み取れる。また、(30)のように“一只手”と共起できないのも、“捧”は「両手で持つ」動作で、「片手」では“捧”の表す動作が成り立たないからである。

このように、“捧”は必ず「両手で持つ」ことを表すが、“托”と“端”は、「片手」か「両手」かはとくに制約がないのである。

### 2.2.2. 手による支持の仕方

“托”“端”“捧”三動詞の動作は、対象物との接触部位がそれぞれ違う。

(31) 張三伸平手、托/<sup>×</sup>端/<sup>×</sup>捧着碗。(張三はてのひらを平に伸ばし茶碗を持つ)

ている。)

- (32) 張三窩着手、<sup>x</sup>托/端/捧着碗。(張三はてのひらを少しまるめて茶碗を持っている。)

このように、“托”は対象物を下から支える動作で、てのひらを平に伸ばして対象物と接触することを必要とするが、“端”と“捧”は、てのひらを丸めて対象物と接触することを必要とする。さらに、同じく「手を丸めて」と言っても、“端”と“捧”とでは支持の仕方が違う。

- (33) 張三手心緊貼着碗、輕輕地<sup>x</sup>端/捧了起来。(張三はてのひらを茶碗に密着させながらそれを持ち上げた。)

- (34) 張三握着雞蛋、騰出母指和食指端/<sup>x</sup>捧起了碗。(張三は卵を握ぎったまま親指と人差指で茶碗を持ち上げた。)

このように、“端”は主に指で対象物を持つのに対して、“托”と“捧”は、指だけではなく、てのひらを用いて対象物を支持することを表す。

- (35) 張三托着一个碗。(張三は茶碗を手のにせている。)(図 a)

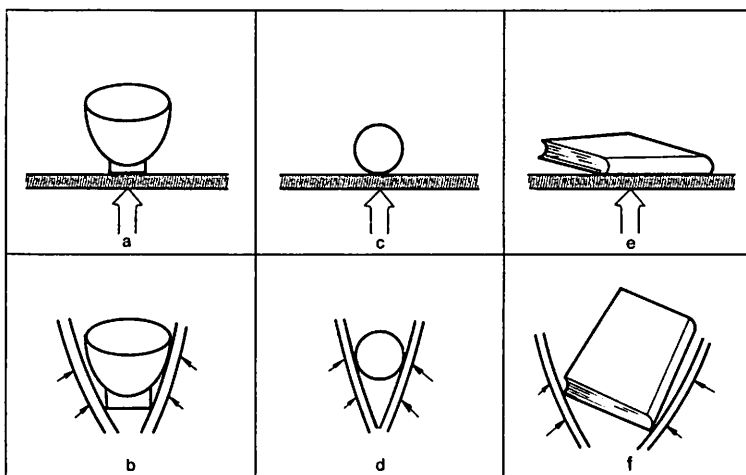
- (36) 張三捧着一个碗。(張三は茶碗を捧げるように持っている。)(図 b)

- (37) 張三托着一个乒乓球。(張三はピンポン玉を手のにせている。)(図 c)

- (38) 張三捧着一个乒乓球。(張三はピンポン玉を捧げるように持っている。)(図 d)

- (39) 張三托着一本書。(張三は一冊の本を手のにせている。)(図 e)

- (40) 張三捧着一本書。(張三は一冊の本を捧げるように持っている。)(図 f)



図に示した通り、同じくてのひらを用いて対象物を支持する動作でも、“托”はてのひらを平にして下から対象物を支え持つ動作を表すが、“捧”はあくまでも「両手」のてのひらを器の形にして対象物をすくうように持つ動作を表す。

## 2.3. “端”と“捧”の特別な意味用法について

### 2.3.1. “端”の「移動性」について

“托”“捧”は対象物を支持する動作のみを意味するが、“端”はその上に、発話の場面によって、「対象物を運ぶ」意味まで表現することがある。

(41) 我托／端／捧着茶。(私はお茶を持っている。)

(42) 你先坐着、我去<sup>x</sup>托／端／<sup>x</sup>捧茶。(どうぞお座りなさい、すぐお茶を持ってくるから。)

例文(41)は、単に対象物を支持している状態を叙述する文で、“托”“端”“捧”のいずれも用いられるが、例文(42)は、対象物を、「持ってくる」動作を表す文なので、“端”しか用いられない。もし、“托”“捧”を使うとすれば、

(43) 你先坐着、我去把茶托／来。(どうぞお座りなさい、すぐお茶を持ってくるから。)

と言うように、動詞の後に方向補語の“来”を付け加えなければならない。そして、

(44) 把碗托／端／<sup>x</sup>捧平点兒。(茶碗を平らに持ってください。)

(45) 別把湯？托／端／？捧洒了。(スープをこぼさないように持ちなさい。)

このように、“端”は発話の場面によって「容器内にある物を水平を保つように運ぶ」という内容を表す場合があるが、“托”“捧”には、そのようなことがない。ちなみに、

(46) 把剩下的菜端走吧。(残った料理を持って行きなさい。)

(47) 服务员一天要端好幾趟菜。(サービス係は毎日何回も料理を運んでいる。)

などのように、“端”はよく「料理を運ぶ」意に用いられるのであるが、それは“端”は主に指を使って容器を平に持つ動作であり、しかも、通常の場合、料理は容器に入れて運ぶものだからであろう。

### 2.3.2. “捧”の心理的な要素について

“捧”は「両手を器にして対象物を持つ」動作なので、“托”“端”に比べて、対象物を「大事に持っている」という心理的な要素がある。

(48) 李克会把李鴻峰的入学通知書緊緊捧着在胸前、悲喜的淚珠順着臉上的皺紋溝、一滴滴滾落下来。(李克会把李鴻峰あての入学許可書を胸まで持ち上げると、

悲しさと嬉しさの交じった涙が溢れ出て、一滴一滴深く刻み込まれたしわに沿って流れ落ちた。) (唐在禄「銀杏樹下的“状元夢”」《人民日報海外版》1987.10.5.)

(48)は、大事なものを、恭しく持っている状態の用例である。ここの“捧”は“端”と置き換えができない。“托”とか“拿”とは置き換えられないでもないが、そうした場合、「対象物を大事に持っている」ニュアンスが消えてしまう。更に、次のような例もある。

(49) 小馬兒在耳朵里找出洋火、在靴底上劃着、用兩隻小手捧着、点着了灯。(小馬兒は頭巾の耳当ての中から一本の黄燐マッチを取り出して、靴の裏で擦りつけ、炎が消えないように二つの小さな手で囲むように持ちながら豆ランプに点火した。)『駱駝祥子』(p.92)

ここの“捧”も、マッチの火を消さないように注意深く持っている用例である。“捧”は「物を大事に持っている」意味から、さらに次のような比喩的な用法がある。

(50) 張三愛吹 { 捧人。(張三はよく人をおだてる。)  
                  × 托  
                  × 端

(51) 有如衆星 { 捧月、B歌手在幾位歌手中間更顯漂亮了。(まるで月が星に囲  
                  × 托  
                  × 端

まれたように、何人かの歌手に取り囲まれたB歌手は、いっそうその美しさを輝かせた。)

(50)(51)の“捧”は“托”“端”と置き換えられない。“捧”には「対象物を大事にして持つ」という心理的な要素があるが、“托”“端”にはこのような要素がないからである。

### 3. まとめ

以上の分析から、三つの動詞のそれぞれの意味特徴を、次のようにまとめておく。

“托” <片手か両手のてのひらを上向きに固体の対象物を支え持つ。>

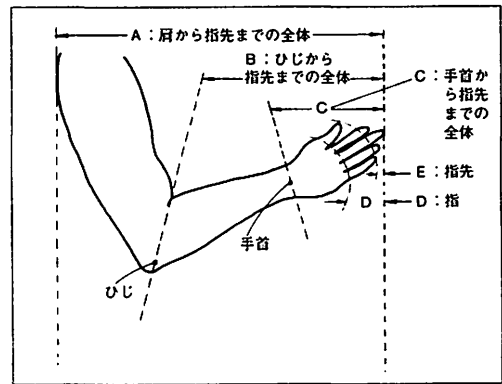
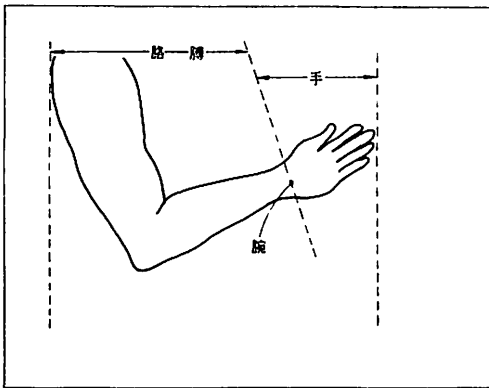
“端” <片手か両手(主に指の力)で容器を水平に持つ。<sup>2)</sup>>

“捧” <両手を容器のようにして、固体、液体、粉体の対象物をすくうように、もしくは胸前まで持ち上げ、捧げるように持つ。>

(注)

1. 「手」という語の意味領域について

“托”“端”“捧”は「手」を使う動作動詞であるが、次の図で示すように「手」という語の表す身体部位については中日両語では、かなり違っている。日本語の「手」はA～Eまでを表すが、中国語の“手”は、厳密に言えばそのなかのCの意味しか表していない。本論は、中国語の動詞を分析するものなので、以下、“手”という語の表す身体部位は、図aのとおりである。



図a (『新華』 p.424による)

図b (嶋田1978 p.15による)

2. 文脈によって「対象物をもって運ぶ」意味をも表すことができる。

／参考文献／

愛知大学編1987『中日大辞典 増訂第二版』大修館書店

荒川清秀1982「中国語動詞にみられるいくつかのカテゴリー」(『愛知大学文学論叢六七』)

王硯農他1984『漢語常用動詞搭配詞典』外語教学与研究出版社

王安節1986『簡明類語辞典』黒龍江人民出版社

倉石武四郎他1983『岩波日中辞典』岩波書店

香坂順一1982『現代中国語辞典』光生館

国立国語研究所1964『分類語彙表』秀英出版

国立国語研究所1972『動詞の意味用法・記述的研究』秀英出版



柴田武他1976『ことばの意味1』平凡社  
柴田武他1979『ことばの意味2』平凡社  
国広哲弥他1982『ことばの意味3』平凡社  
嶋田千寿子1978『「手」の意味分析』（『福岡教育大國語文学会誌』一九）  
志村良治1982『日本語の語彙と中国語の語彙』（『講座日本語の語彙2』）明治書院  
新華詞典編纂組編1980『新華詞典』商務院書館  
中国語学研究会編1969『中国語学新辞典』光生館  
陳濤他1972『日漢辞典』商務印書館  
山田忠雄1973『新明解国語辞典第三版』三省堂  
老舍1978『駱駝祥子』人民文学出版社  
竹中伸訳1981『駱駝祥子・満洲旗人物語』学習研究社

言語経歴 1954年 中国廣州生れ  
0歳～30歳 中国廣州  
30歳～ 東京都目黒区、世田谷区

(Liu Li・東京都立大学大学院学生)